大陸（中支）

浙贛（せっかん）作戦従軍記

兵庫県　田中　稔

私は、徴兵検査を受けた昭和十五年の暮れに召集令状がきて、鳥取の歩兵第四十連隊に入りましたから、甲種合格になった人より早く軍隊の飯を喰ったことになります。

私の家は農業で両親は健在でした。長兄は私と十九歳違い、次兄は十一歳違いでしたため、兵役免除の年齢になっていました。三番目の兄は七歳違いで、日支事変で脚に貫通銃創を受けています。すぐ上は姉で四歳違いですから四男一女の末っ子が私です。

徴兵検査は第一乙種でしたから、赤紙が来たと連絡があった時は「えらく早いなあ」と思いました。京都を「万歳、万歳」に送られて郷里に帰り、再び日の丸の旗に送られて鳥取連隊の営門をくぐりました。同僚は皆、召集兵ばかりでした。早速、営門から鳥取砂丘まで駆け足で訓練です。砂に脚を取られて転ぶやら、頭から砂に突っ込むやらで大変難儀しました。教官の話では「お前らのこれからの行くところも砂で苦しむところだ。だから今の苦労は必ず役に立つのだから辛抱しろ」でした。

しかし演習の終わりで兵器の手入れの段になると、小銃の中に入った砂の除去に大変泣かされました。一粒でも砂が見付かれば「手入れ不充分」でビンタか捧げ銃などが待っていました。そのころの印象は強烈に

私の脳裏に残っているのか、あれから六十年を経た今でも夢を見ます。小銃を紛失した夢を見て、どうしようともがいて、目が覚めて夢で良かったと、ほっとするのです。

少しは軍隊生活に慣れてきたかなあと思い始めた昭和十六年三月十六日に宇品を出航して北支の塘沽に上陸、天津、保定を経て石家荘に着き、トラックで約一時間余り東南に向け走り、威県という小さな町に着きました。ここに私の所属する第百十師団第百四十連隊第四中隊の本部がありました。

師団長は飯沼守中将で石家荘に司令部があり、連隊長は小川全勝大佐で南宮という所に連隊本部がありました。第四中隊長は木村義信中尉です。私たちはこの威県で二十日間の現地教育を受けて、一等兵に進級し、第一小隊の駐屯する大安という田舎に行きました。

小隊長は山下要助少尉で立派な体格をしていました。第二分隊長小崎奏伍長の部下九人の中の一人となりました。小隊全員四十一人で大安部落の治安、警備に当たることになったのです。古年次兵も召集兵ばかりで鳥取、兵庫の出身者で、いわゆる郷土部隊です。

一個中隊（一九一人）の内訳は三個小隊一二三人（各小隊四一人×三）、指揮班三五人、他に派遣三三人でした。

最初、軽機手を命ぜられましたが、貧弱な体格の私では軽機が重くて走ることもできず、動作も鈍いので途中で交替してくれと文句を言ったらビンタをもらいました。戦後、伍長に会った時「あんたにビンタをもらいましたなあー」と言ってやったら変な顔をして黙っていました。

この地域は平野でコーリャン畑でしたが、共産八路軍の勢力が強い所で、日本軍の討伐と八路軍の侵攻が繰り返されていました。部落は煉瓦を積み上げた高い塀で囲まれ、四隅に望楼を設けて銃眼を作り警戒にあたっていました。分隊の隊舎も民家を改造した平屋建てでオンドルもありました。

村長は二人いて日本用と八路用と使い分けしていま

した。日本軍の命令で周囲の道路のかさ上げをしたと思ったら、八路の要求で道路の切断を夜間に行う。それの復旧を日本軍の指示でやる。再び八路の要求で切断するの繰り返しですから現地住民の苦労は並大抵ではありません。弱小国の悲哀を見せつけられたものです。

昭和十七年四月兵制改編のため第百四十連隊は満州の第七十一師団（延吉）に配属を命ぜられました（当時の一兵卒は全く知らなかった）。時を同じくして日本の内地は史上初の敵機の本土空襲を受け、一大ショックを受けていました。

直ちに敵機の基地がある中支方面の飛行場壊滅作戦が支那派遣軍に下命されました。これが有名な浙赣作戦です。

昭和十七年五月、我が第百四十連隊は臨時に第三十二師団に配属され、この作戦参加のため第百十師団の中で唯一の参加部隊となり石家荘に集結したのです。大安の部落民とも別れ、すべて整理しての集結でした。次の集合地、杭州には列車輸送でした。途中の蘇州駅では蘇州美人からお茶の接待を受けました。

昭和十七年五月作戦開始。杭州を起点として正面の敵である顧祝同指揮の中国軍を金華、蘭谿で約二個師を壊滅しましたが、ちょうど中支では雨季に入り雨の降らぬ日は五十日間のうち僅か九日間でした。したがって道路は水没し、一歩誤れば水死の危険がつきまとっていました。とくに夜間行軍の連続では歩きながら眠る訳ですから、うっかりすると道だと思って水たまりの中へ入り込んで、転んだら最後、誰も助けてくれません。「○○はいないか、どうした」という者もいないのです。疲労困憊の極みになると自分を守るだけで精いっぱいなのです。それに加えて雨のため補給は絶無、栄養失調と豪雨と炎暑とで倒れる者も多かったのです。

一兵卒では作戦のことは全く判らず、ただひたすらに上の人の命令に従い、進めと言われて起き上がり、小休止となれば所かまわずバタッと倒れて休みます。また前進と言われて歩きます。どこへ行くやら、いま

どこにいるのか全く判らず、ただただ歩くのみでした。

増水中の河を渡って杭州北方の地区を進攻するため山地を踏破したときは「もうどうなってもいいや」と思いました。

太平橋という所で何日か駐留しましたが、食物は何ひとつありません。道路付近の水田の青い稲を刈り取って籾摺りして食べましたが、赤い米の玄米で内地の赤飯とは似て非なるものでした。

この作戦は大雨、洪水と渡河作戦が多いので、軍靴の縫い糸も軍馬の蹄鉄の釘も腐って抜け落ちる始末で、大切な靴は首にぶら下げて河を渡りました。浙赣鉄道の破壊された鉄橋を渡って玉山に向かうころは、弾薬も糧秣も補給が絶えて最も苦しい時期でした。

昭和十七年九月、作戦の最終目標の広信も落ちて敵飛行場群も使用不能になったので作戦が終わり、連隊は杭州から石家荘に帰り、満州の延吉に向け出発しました。十月延吉に到着、天幕生活を続けながら兵舎の建設に従事しましたが、満州の気温は厳しく、大安時代を懐かしむ声が多かったようです。水は深井戸を掘って汲み上げました。

作戦中の疲労のためか体重が僅か三十四キロに減り、他の者でも極端に痩せたものが身体検査の結果十五人が選ばれて南満州の保養地に派遣され、栄養満点の食事を取りながら体力の回復、訓練にはげみました。約一ヵ月後、延吉に帰り、関東軍（山下奉文大将）の第七十一師団の指揮下に入り国境警備に就きました。

昭和十八年十二月、上等兵に進級、そのころになると在隊三年になる者は内地帰還となりました。私は運悪くチフスに罹り、延吉病院に入院させられ非常に残念に思いました。二十日後、菌がなくなったからといわれて退院。既に部隊はいなくなっていました（連隊は北海道旭川に移駐）。仲間四人も部隊から置き去りになっていました。こうなったら五人で帰るしかないと相談し、証明書を手にして延吉から朝鮮を縦断して釜山に出て連絡船に乗り、門司から日本列島を一路旭

川目指して北上、漸く北海道旭川の第百四十連隊に着きましたが兵隊は一人もいませんでした。

見知らぬ下士官から「私物が届いているから着替えて帰ってください」と召集解除を言い渡されました。何か私らの第百四十連隊だけが師団から切り離されて、北支→中支→北支→満州→北海道と転々と移され、まるでまま子扱いになった気分でした。旭川ではリンゴ一箱をみやげに買いました。

昭和十九年三月に家に帰り家族全部が元気で、空襲にも遭わず良かったと思いました。

仕事は神戸製鋼の会社で日高町にある熔接棒を造る日高工場の研究課に就職しました。一年後の昭和二十年四月に再び召集され、大阪の第八連隊に入りました。もっぱらガス教育でガスマスクを装着しての訓練でした。ガス弾を使って攻撃するのではなく、米軍がガス攻撃してきた時に備えての教練でしたが、一日中マスクを着用するのは思っていたより苦しいものでした。

大阪空襲の後、状況視察のためトラックで街に出ると真っ黒焦げの死体の山が至る所にあり、その惨状に声も出ませんでした。新兵はほとんどおらず、野戦帰りの召集兵が多かったので自分の身の回りはすべて自分でやりました。

衛兵勤務の時、三十歳過ぎの老兵が竹の水筒をぶら下げて並んで営門を出て行く列を何回も見ましたが、果たしてどこへ行ったのか。

そのころの兵食は大豆飯で米が少し入っていました。神戸の空襲のあと被害状況調べで見に行きました。日本も終わりだなあーと感じました。

第八連隊から復員する時は復員式のような行事は何もなく三三五五勝手に帰ったようでした。毛布、軍靴、水筒、雑嚢等を持って帰りました。米や食料の分配はありませんでした。噂では偉い人が横流ししたとのことでした。

いま、当時を振り返りますと、幸運だったのは終戦一年前に内地に帰れたことです。もし満州にいたらソ

連軍の侵入に直面して戦死するか抑留されてシベリア送りとなったでしょう。また、一番苦痛だったのは作戦に従軍したことです。のどが渇いて田圃の水を飲むとすぐ下痢。しかし行軍が始まり汗を流すと不思議に下痢が止まるのでした。

大雨の中を行軍に次ぐ行軍で疲れ切ると「もう死んだ方が楽」と思うのですが、敵弾がピューとくると思わず首をすくめてしまいます。小休止となるとバタッと倒れます。来る日も来る日も雨になると陸地は泥海と化し、河川は氾濫して渡河が困難となります。被服は乾く間がなく、股ずれと水虫に悩まされました。ただ不思議なことは何百という「しらみ」と共生して、これには気付かず作戦から連れて帰りました。いま当時を思い起こすと「よくぞ生きて帰れた」に尽きます。

戦後ある時期に自治会長、農協役員、老人会長等を引き受けていましたが、一時期にすべての役職を辞めましたら不思議なことに口が回らなくなり、言語障害を起こし、ネクタイの結び方も忘れる始末になり、これは大変と再び人から頼まれたら努めて引き受けることにしましたら元に戻りました。

第四中隊の戦友会（一五〇人）も中隊本部があった威県の名を取り威県会と名付けて毎年一回の集まりを続けています。そんな中、思い出の写真集『戦友たちの記録・黄塵の下で』を刊行しましたら非常に好評でした。

退職して一応現役から退いてつくづく考えたことがあります。この大戦で多くの犠牲者を出し、とくに私たちの戦友なり幼な友達が還らぬ人になられました。せっかくこの世に生を受けながら、これからという人生を終えることとなり、さぞさぞご無念だったことと思います。

それに引き替え、私たちはいまだこうして生を受けています。誠に申し訳なさを感じつつ過ごしている昨今です。

どうか安らかに眠ってくださいとお祈りするばかりです。それと戦争は嫌なものです。みんなを不幸にす

るだけです。戦争に行ったものは皆そう思っております。だんだんと私達老齢者は少なくなり、この心を伝える人も間もなく皆無となることでしょう。そこで今、私たちは平和のありがたさを叫び、戦争の非を声を大にして伝えなくてはならないと思う次第です。

大東亜戦争出征記
―中支～南支―

愛媛県　河野　昇

私は大正七年二月二日生まれの召集兵です。昭和十八年九月十六日、香川県丸亀市の歩兵連隊へ教育召集で入隊し、三ヵ月の教育の後、一応召集解除され帰宅しました。その召集解除の折言われたことは、「お前たちは一度帰してやるが、一年以内には必ず再び召集があるから、身体を鍛えておけ」ということでした。

その当時の私の家庭は、父、母、私、私の妻、長男（三歳）、弟、妹の七人家族で、農業を営んでおりました。農地は約二町歩で米作をし、養蚕（年三回）もやり忙しい生活でした。父はその外、田畑の仲介もやっていました。私が家業から離れて兵役につくことは、家計の上でも苦しいことでした。

約半年後、今度は高知市の歩兵連隊への召集が来ました。召集兵としての教育訓練の後、昭和十九年八月列車輸送で坂出へ、中支の鯨第二三四連隊へと旅立ちました。高知市朝倉の駅で父が三歳の孫（私の長男）を背負い、私の妻と一緒に竹の先に丸くて長い筒状の提灯に火をつけたのをかざして、駅前の混雑の中を見送ってくれました。父、妻、子と目と目で別れ、車中の人となりました。

随分昔のことですが、はっきりと覚えています。残念にも、父も妻も既に死別しました。その悲しみは如何とも仕様がありません。

昭和十九年八月の私共の鯨第二三四連隊は支那湖南省衡陽攻撃中でした。私共補充兵は坂出より衡陽までの行程に実に二ヵ月もかかりました。理由の第一は昼